

やまとの名品

天理図書館



おく ほそ みち あん ぎゃ の ず
奥の細道行脚之図

縦 87.5 cm 横 28 cm 一軸

元禄6年(1693)写

僧姿の旅人二人、笠を手に杖をつく芭蕉と振り分け姿の門人曾良、とみれば『奥の細道』行脚の旅姿である。

画者森川許六（一六五六～一七一五）は、彦根藩井伊家に仕えた三百石の武士。元禄五年（一六九二）の秋、江戸在勤中に松尾芭蕉に入門、蕉門十哲の一人にあげられる。五老井あるいは菊阿仏等とも称すが、俳号「許六」は六芸（六種の技芸）を許すという意味だろうか。生来多芸の彼は、狩野流画法を学び、特に画技に秀で芭蕉門では随一と言われる。

芭蕉に敬意を表してのこと

であろう、肖像の背後（右端）

に「元禄癸酉春五老井居士許六謹書」と識語があり、元禄六年春の染筆になることを伝えていいる。当時芭蕉は『奥の細道』を執筆中であり、許六がその内容を詳細に承知していたことは、許六自筆『旅懐狂賦』によって明らかである。江戸詰めの折り、許六は直接芭蕉から『奥の細道』の旅の土産話を聞いたのであろう。

芭蕉に「画はとつて予が師とし、風雅はをしえて予が弟子となす」（芭蕉『許六離別詞』）と高く評価され、本画像はその画才をもって描きあげた傑作である。淡く紅味をお



びた頬、少し伸びかけた髭、鋭いまなざし等は旅のきびしさ、そして俳諧師芭蕉が持つ人間としての温かさを見事に表現している。

現存する芭蕉像は、そのほとんどが芭蕉没後に描かれたものだが、本画像は芭蕉生前の作品として最も真を伝え、中学、高校の教科書にも取り上げられて広く世に知られる。

（天理図書館 牛見正和）

天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>
10月19日(金)より11月11日(日)、開館77周年記念展「中国の絵入本
-明・清の版本を中心に-」を開催
(本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください)